“reading woman”の意味と可能性

森　川　麗　子

I

フェミニズム批評は最近、息の長い批評活動となる様相を呈している。本論では、フェミニズム批評における“reading woman”の意味と可能性を探ってみたい[(1)]。なお、“reading woman”とは、主体としての女性と客体としての女性の両方を含む表現である。すなわち、「女性として読むこと」と「女性について読むこと」であり、主として英語表現の簡潔さという理由により、“reading woman”のまま使うことにする。

“reading woman”は、ジェンダー論と読書論の両方にかかわる問題である。まず、前置きとして、フェミニズム批評とイーザーとヤウスの読書論を一瞥する。私は次のように、フェミニズムと女性学とフェミニズム批評の三者の相互関係をとらえている。すなわち、フェミニズムとは女性学を支える中心思想であり、フェミニズム批評とは女性学と文学批評との出会いの賜物である、という見方である。女性学の最初の講座は、1969年にアメリカで始まったのだが、フェミニズム批評にとって、この女性学のインパクトは不可欠であった。女性視点の導入、又は、女性存在の前景化こそが女性学の真骨頂であり、これは、フェミニズム批評についても同様である。20年弱の女性学の展開は、“gender” “sexism” “herstory”という三語の誕生と定着に象徴される。因みに、“gender”とは生物学的性である“sex”と区別された、社会的・文化的性の意味であり、“sexism”には、個人よりも性（“sex”）を優遇する発想・姿勢・その具現化の

すべてが含まれる。男性の歴史という意味での "history" に対応するのが "herstory" である。フェミニズム批評は、女性学の成果を踏まえながら、文学を括弧付きの状態へといわば格下げし、女性作家から女性読者へと関心の対象を変えてきている。精神分析学への接近や理論化の動きと並行する、フェミニズム批評のこの女性読者への注目は、全体の流れの中では、変化というよりも原点への回帰と言うべきである。なぜならば、フェミニズム批評には、当初から、読者の明白な自意識があったからである。たとえば、シドニー・ジャネット・カプランは、

> For graduate students during the early 1960s, the predominant approach to literary study was still the 'New Criticism'. Our experience and training in criticism was primarily devoted to a steady, detailed reading of the text in isolation from outside influences such as the author's life, historical and political events, and our own responses as readers. And when I refer to the 'text' I mean one of a carefully limited number of texts which had been designated to be among the best ever written. The distance between our methods of study and what we were experiencing in our own lives, as the social changes of that decade affected us, became increasingly apparent. I remember that during those years I found myself reading with a vague dissatisfaction, holding back an undercurrent of alienation, uneasiness, and a sense of living in the wrong time-frame or mind-frame.

と、彼女自身のフェミニズム批評への出発点となった、「新批評」への異和感や不満を表明している(2)。このように、読者の個人的な体験が自己主張の機会を見出し、続いて、それが女性視点としてのアイデンティティを確立して行った、というのが、フェミニズム批評の原点と展開である。

次は、女性学と同時代的関係にある読書論についてである。ヴォルフガング・イーザーの『行為としての読書』、ハンス・ロバート・ヤウスの『挑発としての文学史』と "reading woman" のそれぞれに見られる、読者の実体のとらえ方

を比較してみる[3]。フェミニズム批評が読者個人から始まったのとは対照的に、イーザーとヤウスは、最後に、ようやく、読書行為や読者にスポットライトをあてた、と言える。たとえばイーザーは、「テクストを読むという行為」を今まで「陽の目を見なかった」(p. 32) 事実と言い、ヤウスは、読者を、文学と芸術の歴史が隠蔽又は黙秘してきた「第三階級」(p. v) と呼んでいる。このような読者へのスポットライトによって、権威の失墜を余儀なくされたのが、テクストの自立性である。

さて、イーザーは、「内包された読者(the implied reader)」と「空白(nothing)」という概念を導入して、読者や読書行為を次のように説明する。「現実の特定の読者」(p. 63) ではなくてあくまでも「概念」(p. 58) である「内包された読者」の役割は、テクスト中の「さまざまな遠近法を統合して」(p. 60)、その共通点である「テクストの意味」(p. 60) に到達することである。そのために必要な「一定の視点」(p. 60) は、読者が自由に選べるものではなくてテクストが規定する。一方、「空白」とは、「テクストと読者の基本的な非対称」(p. 286) のことであり、これがあるからこそ「読者によって異なる多様なコミュニケーションの成立」(p. 228, 筆者強調) が可能だ、とイーザーは述べる。ところがこの「多様なコミュニケーションの成立」を読者の意味と換言すれば明らかになるように、「内包された読者」と「空白」とは相互に矛盾しあう概念なのである。"reading woman" と比べた場合には、イーザーの読書論における読者に対するテクストの優位という関係が、いっそう明らかになる。また、「空白」という概念の背後には、読者の重要性の認識があることは確かなのだが、読者がテクストと対等の関係になることはない、と言える。以上のように、イーザーの読書論には、「現実の特定の読者」の潜在力への配慮はみられるが、それが読者自体へのスポットライトにはなっていないのである。

イーザーに比べてヤウスは、読者により積極的な役割を認めているようである。たとえば、次の引用文はどうであろうか。

作者、作品、公衆という三角形のうち、公衆は受動的な部分であるばか

りか、つまり単なる反応の連鎖をなしているのではなくて、逆に歴史形成のエネルギーにもなっている。文学作品の歴史的生命は、その受取人の能動的な参与なしには考えられない。すなわち、読者の仲介があって初めて、作品は、一種の連続を保ち、変化していく経験の地平の中に入っていくのである。連続していることによって、単なる受容は批判的理解へ、受動的受容は能動的受容へ、容認されていた美的規範は新たな、それを凌駕する生産へと、絶えることのない変転が遂行されていく。(29－30頁)

彼は、「消費する主体」(p. 23) である読者を「歴史形成のエネルギー」源と考えている。別の例としては、文学史追究の手段として彼が導入する「期待の地平 (the horizon of expectations)」という概念が、あげられる。ヤウス自身の定義がないので断定は慎しまなければならないが、この「期待の地平」の主体は、「作者・作品・公衆という三角形」の各構成要素と考えられそうである[(4)]。従って、ヤウスにはテクストの優位性というよりは、読者の主体性が一貫して認められるが、それでもなお "reading woman" との違いも明らかである。歴史という言葉が頻出するにもかかわらず、"herstory" との区別はもとより、その意識すらないのである。あるいはまた "gender"への配慮や関心も見られない。上野千鶴子氏の

女性解放の理論は、女性の視点から現状の社会を相対化して見せることに成功した。そのことを通じて「女が論ずる」ことは、「女を論じる」ことにとどまらず、「女の視点から社会を論じる」ことであることを示して、男性の論者をも巻きこんでいったのである。リブとの対比で言えば、「他人にわかるように」伝えるという一点で、女性解放の理論はリブの文体とちがっていた。もちろん解放理論の多くは、リブの直観をあとから文節し言語化したものにほかならないが、いわば「理性のことば」で語ることによって、リブの表現に共感はしても理解を示さなかった多

くの人人に、女性解放の理論は届いたし、またそのことによって「理性のことば」・「感性のことば」という言説上の性分業を、実践的に否認した。(著者強調)

という現状認識を背景にすると[5]、文学理論の歩みは遅い、と言わざるを得ない。イーザーもヤウスも、いわば「巻きこ」まれてはいない男性論者であるが、その理由は、「現実の特定の読者」の存在感や主体性の希薄さ・ジェンダー的視点の欠如にある。

さて、"reading woman" へと一歩踏みこんでみたい。「現実の特定の読者」とテクストとの対等な相互作用を前提とした、一種の実験報告例を二つ紹介しよう。ひとつは、ノーマン・N・ホランドとレオナ・F・シャーマンによる "to explore *our own re-creations* of the gothic" (筆者強調) を目的とする実験報告に関するものである[6]。他方は、ディヴィッド・ブライチが自分の学生の協力を得て行なった、ジェンダーについての実験とその分析である。

ホランドとシャーマンは、ゴシック物語というテクストを選択し、それに対する各自の「再創造」を比較して記述する。結果を見る前に、私たちはまず二点に注目しなければならない。彼らのテクストの選択には、はっきりとしたジェンダー意識があった、ということが一点である。この選択は、1974年にアメリカで出版されたゴシック物語は2300万冊にも上り、読者のほとんどが女性である、という事実に基づいている。二つ目は、"re-creation" という言葉が暗示する、テクストに向きあう読者個人の積極的な主体性である。ホランドとシャーマンは、文学テクストの再創造の主体を "literent" と名付ける。この造語や「再創造」という言葉からは、受容者という言葉が暗示する受動性への不満が感じられる。従って、彼らはまさに主観から出発した、と言える。しかし、戯曲をテクストとする "literent" を意味する "dramatent" と、笹山隆氏の「純粋観客」の両者は、「最初からわれわれ自身の主観的反応を基盤に据え」るとはいえ、相容れない存在である[7]。「純粋観客」とは「できる限り個人的・偶発的な要素を引き去」った存在であり、「われわれ自身の主観的反応を」「客観化」する

ための「観念化された観客」だからである[8]。笹山氏のホランドへの批判は当然ではあるが、同時に、正しい読みへの無関心はフェミニズム批評全体の共通点でもある。正しい読みがテクスト主導的なことを考えれば、是非は別にして、これがフェミニズム批評と溶け合わないことは納得できるはずである。

さて、ホランドとシャーマンの実験は二つのことを明示する。男性の "literent" ホランドは、自らのアイデンティティが原因で "re-creation" に失敗し、一方、女性の "literent" シャーマンは成功する、ということが分る。ホランドのとまどいや不愉快は、次のように率直に語られる。

> HOLLAND : For me, both identifying with a female and imagining being penetrated call into question my male identity. Both raise the threat posed by the castle and the gothic machinery to a pitch where I no longer wish them relevant to me, the male me, and I sense myself relegating gothic to an alienating category, "women's fiction." Perhaps this is why I am acutely aware of another property of the castle — its flinty hardness. I want those stones to be inert, neither hurt nor hurting, whatever threats and penetrations go on between villain and victim. *They* cannot be penetrated, and if not they, then not I. (p. 220)

シャーマンの成功は、彼女が "reading woman" になり得た、という意味である。ホランドとは対照的に、シャーマンの "re-creation" の過程は、

> SHERMAN : I feel "truthful" and socialized woman come together in this longing to have both the active, penetrating role usually taken by males in our society (and in the gothic novel) and the traditional receptivity assigned to my sex. As I follow, say, Emily in *The Mysteries of Udolpho*, her intrusive, aggressive mode elicits threats of violence, rape, and murder. I can feel relief — my guilt prevailing — as Emily does not achieve a mature realization of active, female sexuality ; but finally I am distinctly unhappy with the even more restricted, passive attitude toward her sexual role with which she finds safety in the nonsexuality,

> really, of romance and La Vallée. I feel in the duality of her position the tension between the solutions I seek as an adult woman and the solutions I once accepted from society in childhood. (p. 223)

から明らかなように、自らのジェンダー・アイデンティティの再確認であると同時に、テクスト中のジェンダーの認識過程でもある。すなわちゴシック物語の "literent" シャーマンは、主体としての "reading woman" に成り得ることによって、客体としての "reading woman" にも成り得た、というわけである。ここには、"reading woman" についての重要な示唆が認められる。それは、"reading woman" に含まれる主体としての女性と客体としての女性の相互関係のことである。両者は相補的関係にあるだけではなく、客体としての女性の出現は、主体としての女性の存在を必要条件とするということである。主体としての女性の出現が、客体としての女性の出現に先行しなければならないという、主体としての女性存在の先行性は、フェミニズム批評全体にかかわる重要な関係と思われる。後に再度言及する予定である。

ホランドとシャーマンの実験は、ゴシック物語に対する男性読者の反発と女性読者の共感、という一般的傾向に一致したが、二つ目の明示点として、その理由がある。

> Gothic novels enabled literents, especially women, to experience these conditions in the gothic castle at the hands of gothic mothers, fathers, and lovers (and, of course, *gothick* meant "barbarous, rude, savage"). The genre's romance and its conventional ending in marriage allowed a woman to use romantic love as a defense against the male, sexual forces that menaced her at the same time that she could enjoy those forces (either as actor or victim) in fantasy. The woman could be——and not be——passive and resistant during the body of the novel. Then the ending provided her a way to arrive at the right psychological solution for that society and that time. (p. 223)

ゴシック物語は、女性読者の両性愛的願望をみたすのにすぐれているわけであ

る。すなわち、ゴシック物語の "literent" が、シャーマンのように "reading woman" となり得る秘密は、主体としての女性、つまり女性読者、と客体としての女性、つまりここではゴシック物語中の女主人公、との共通点である女性の両性愛的願望に見出される、ということである。

ジェンダーを視野におさめるとは、ジェンダー・アイデンティティの形成される三・四才に注目することでもある。ここに幼児期の母親とのかかわりあいという問題が出現する。そして、これは、娘と息子のそれぞれにとっての母親の他者性の程度という問題につながる。一般論としては同性である娘の方が、母親に対する他者意識は、息子より低い。ブライチは、母親の他者性と自らの実験結果とを関連付ける。次の引用は、フォークナーの "Barn Burning" をできるだけ完全にしかも正確に物語るように、という課題に答えた120人ほどから、ブライチが無作為に選び出した男女50人ずつの分析結果である(9)。

> The men retold the story as if the purpose was to deliver a clear, simple structure or chain of information : these are the main characters; this is the main action; this is how it turned out. Details were included by many men, but as contributions toward this primary informational end—— the end of getting the "facts" of the story straight. The women presented the narrative as if it were an atmosphere or an experience. They generally felt freer to reflect on the story material with adjectival judgments, and even larger sorts of judgments, and they were more ready to draw inferences without strict regard for the literal warrant of the text, but with more regard for the affective sense of the human relationships in the story.

このように、女性は虚構世界に溶け込みやすく男性はむずかしい、という男女差が、はっきりと認められた。ブライチは、この差は幼児の言語修得時期における母親の声の他者性に起因する、と考える。すなわち、母親と異性である男児は、女児に比べて、他者を知覚する程度がより徹底的にならざるを得ない、なぜならば、母親の言語は異性の言語だから、ということを意味する。

以上のように、この章で私は、フェミニズム批評における“reading woman”の意味を探ってみた。“reading woman”は、イーザーやヤウスの読者のとらえ方とはちがい、フェミニズム批評の出発点の独自性を受けつぎ、その結果としてジェンダー追究の必要性を自覚する、という展開をみせたわけである。

II

ここでは、“reading woman”の問題点と可能性を考えてみる。問題点は、女性読者のジェンダー・アイデンティティそのものにある。すなわち、女性読者のジェンダー・アイデンティティとは何であり、どのようにしたら獲得できるのか、という大問題である。ジョナサン・カラーは、“Reading as a Woman”と題した章においてフェミニズム批評に正しい理解を示した後に、この章を次のようにしめくくる(10)。

> For a woman to read as a woman is not to repeat an identity or an experience that is given but to play a role she constructs with reference to her identity as a woman, which is also a construct, so that the series can continue : a woman reading as a woman reading as a woman. The non-coincidence reveals an interval, a division within woman or within any reading subject and the “experience” of that subject.

女性読者としてのジェンダー・アイデンティティの獲得には、“to play a role she constructs”という積極的な行為が必要だ、とカラーは述べている。私も全く同感である。しかし、問題はその際の基盤である。“with reference to her identity as a woman, which is also a construct”とあるように、ジェンダーが社会的「構成物」であるために、当の基盤が“a woman reading as a woman reading as a woman”という連鎖としてしか存在し得ないこととなる。この連鎖を切らない限り、女性読者のジェンダー・アイデンティティは確立されないのであり、しかもこの連鎖の切断は不可能だ、とカラーは指摘する。

この指摘は基本的には正しい、と考えるが、この延長上には袋広路か循環し

かないことも事実である。“reading woman” を追究するためには、発想の転換が不可欠と思われる。

ジェンダー・アイデンティティとは、そもそも、それほど固定的なものであろうか。たとえば、ヴァージニア・ウルフは、1920年代に “Different though the sexs are, they intermix. In every human being, a vacillation from one sex to the other takes place[11]” と述べ、今日の日本には「アイデンティティが多様化し、非一貫的なものになったということは、アイデンティティがなくなった、ということを意味しない。アイデンティティのオプションが増えた、ということを意味する」（著者強調）、というように「『近代的自我』概念からスルリと逃げる」「脱近代人」をとらえる上野千鶴子氏がいる[12]。空間・時間を異にするこの二人の女性の共通点は、固定的なアイデンティティという発想からは自由なことであり、これは注目に値する柔軟性と言えよう。

そこで、流動的で柔軟なジェンダー・アイデンティティを前提とする提案を試みたい。それは、「女性読者のジェンダー・アイデンティティとは、演劇空間的だ」と考えることである。すなわち、女性読者のジェンダー・アイデンティティを演劇空間というモデルを利用して考えてみてはどうか、という意味である。

演劇空間とは、一連の演劇行為の総体のことであり、舞台上の役者とそれを見つめる観客が主要構成員である。換言すれば、「現実の特定の」芝居の舞台と、これも同じく「現実の特定の」観客とによって誕生し、成熟し、そして消滅する空間である。その構成要素は有形だが、演劇空間自体は無形である。では、演劇空間の独自性は何であろうか。それは二種類の生身の肉体の相互の現前性、すなわち、虚構と現実という二つの世界に生きる肉体が相互に見つめあって存在すること、と言える。因みに、演劇空間という言葉は、1960年代後半から目立って使われるようになった新しい言葉である。というのは、その発想の根本には、芝居を現実のコピーではなく「もうひとつの現実[13]」、と考える演劇観が存在しているからである。この演劇観は、『共和国』において現実的行為の模倣者だという理由で役者を追放したプラトンにまでさかのぼり得る、芝居を

現実のコピーと考える演劇観とは、本質的に異質である。従って、演劇空間という言葉には、ロゴス中心主義の基本である本物への執着・その結果の本物とコピーの優劣関係が、最初から存在していないわけである。このような演劇空間自体の本質的な自立性は、特に "reading woman" との関係においては重要と思われる。

しかし、演劇空間という言葉は、その独自性においては伝統的な古い言葉でもある。演劇空間自体の独自性は、二つに大別できる。ひとつは先に述べた二種類の肉体相互の現前性であり、他方は、変身を中心とする、演劇空間特有の快楽とも呼べる特質である。「演劇空間特有の快楽」とは、次の意味である。重層的な変身を体現する舞台の役者は、言語と非言語のユニークな関係をつむぎ出す主体としての快楽を経験し、観客は、役者の快楽を受けとめる受け手としての快楽を経験する。観客の役目は重要である。なぜならば、観客がこのように変身の目撃者とならない限り、役者の変身は実現しないからである。従って、演劇空間特有の快楽とは、役者と観客という変身の主体と客体の相補的な関係によってのみ経験される喜びのことである。以上のような演劇空間の独自性、すなわち、二種類の肉体相互の現前性と演劇空間特有の快楽は、あらゆる演劇観に優先し、芝居が芝居である限り変わらないものである。この点では、演劇空間は伝統的な言葉なのである。

では、古くて新しい言葉である演劇空間というモデルは、"reading woman" のどのような特質を明らかにするのであろうか。まず第一に、虚構世界と現実世界との対等な関係がある。つまり、女性読者とテクストとの対等な関係のことである。次に明らかになることは、虚構世界の成立に不可欠な目撃者という役割のはたす能動性である。"reading woman" のヴォキャブラリーを使えば、これは、読むという行為の能動性と言える。無形である演劇空間は、変身の主体と客体間の関係であるダイナミズムと、こういうダイナミズムの結果である演劇空間特有の快楽によってのみとらえられるが、"reading woman" にとってこのことは、どういう意味であろうか。次のように考えられる。ダイナミズムは女性読者のジェンダー意識を、演劇空間特有の快楽は女性読者のジェン

ダー・アイデンティティを、それぞれ意味する、と。

ところで、「現実の特定の」演劇空間における観劇体験と観客の快楽とは、本質的には同一である。「おもしろくない舞台とは、活字で戯曲を読んだ以上のことがおこらない舞台のことだ(14)」とは、演劇空間の真実をついた言葉であるが、このおもしろさとは、観劇体験や観客の快楽の共通の核として息づいているものでもある。演劇空間の成立は、演劇空間特有の快楽の有無に依る。従って、観客がこの快楽を経験し得ない場合には、演劇空間は誕生しなかったのであって、これは劇場という建物の物理的空間でしかない。

演劇空間の成立とは、演劇空間というモデルに倣えば、"reading woman" の成立につながる。観客が、観客だけに可能な快楽を経験し得た、ということは、"reading woman" においては、女性読者が女性読者としてのジェンダー・アイデンティティを確立し得た、という意味を持つ。ここで言う「女性読者としてのジェンダー・アイデンティティ」とは、観客の快楽というモデルからも分るように、決して固定的な内容を持つものではない。重要なことは、女性読者としてのジェンダー・アイデンティティの確立というテクストと女性読者の関係上の完成が、最も望ましい読書行為につながる、ということである。「最も望ましい読書行為」とは、テクストと対等な読者の能動性だけではなく、フェミニズム批評にとっての正道をも意味する。「フェミニズム批評とは女性学と文学批評の出会いの贈物である」、と初めに書いたように、フェミニズム批評の出自の特徴は、女性読者のはっきりとした自意識と「女性解放」という価値基準の存在である。個からの出発であると同時に常に女性全体に向けられた行為が、その独自性を特長へと発展させるためのアプローチのひとつが "reading woman" なのである。書くという行為に比べれば、読むという行為は実践が容易である。従って、より多くの女性に開かれた行為である。以上の意味で、女性読者としてのジェンダー・アイデンティティの確立は、フェミニズム批評の正道につながるわけである。しかも、テクストと女性読者の関係性のこのような完成は、"reading woman" の成就に直結する。この成就によって、主体としての女性と客体としての女性が同時に存在するという瞬間がもたらされるので

ある。演劇空間における観客と同じように、“reading woman” の成就がもたらした、主体としての女性と客体としての女性という両女性の同時存在は、最終的には女性読者、すなわち、主体としての女性、の方へと吸収されて行くものである。ここに、“reading woman” の最大の可能性がある、と私は考えている。つまり、客体としての女性が主体としての女性の中へと吸収されて死ぬことによって、という意味である。従って、“reading woman” の展開は以下のように要約できる。多少ともジェンダーへの関心を抱く女性読者がテクストに向きあうこと、これが “reading woman” の基本をなす。この女性読者とテクストとの読書行為という相互作用が、女性読者としてのジェンダー・アイデンティティの形成という関係を築き、その成就を待って主体と客体の両女性の同時存在が実現する。これが “reading woman” の成立であるが、これは主体としての女性と客体としての女性の一体化に等しい。続いて、客体としての女性は、読書行為の終結とともに、主体としての女性の中へと吸収されて消え、次の読書行為のさいには、主体としての女性の中で再生する可能性をもつ。このように “reading woman” の展開は、常に “reading”,すなわち、「女性として読むこと」、によって導かれるものである。途中に、““reading” が “writing”,すなわち、「女性について読むこと」、に一致するという重要な瞬間を含みはするが、それも、“reading” が “writing” を吸収して自らの一部へと肉化するためのものと言える。フェミニズム批評とは、本質的に “reading” なのである。

以上のように、この章では “reading woman” の問題点と可能性を、演劇空間をモデルとして利用しながら考えてみた。このモデルと “reading woman” との違いが、しかし、ひとつだけある。演劇空間の観客には、当然のことながら、男性の観客も含まれている、という事実である。これは、そのまま “reading woman” にとっての今後の課題であると同時に、モデルとしての演劇空間の有効性の証明でもある。“reading woman” がこの課題をはたした時とは、おそらくフェミニズム批評がその役割を終えた時であろう。少くとも、その時、私たちは「ひとは女性的に男らしいか、男性的に女らしいか、そのいずれかでなければならない(15)」、と訴える必要は感じないはずである。

注

(1) 本稿は、日本英文学会中部地方支部第40回大会（1987年10月３日）におけるシンポジアでの発表に加筆したものである。また、『椙山女学園大学研究論集第19号』（1988年２月発行予定）中の拙論とも一部重なる。

(2) Sydney Janet Kaplan, "Varieties of Feminist Criticism", Gayle Green and Coppélia Kahn, eds. *Making a Difference* (London and New York : Metheun, 1985), pp. 38－９.

(3) W. イーザー,轡田収訳『行為としての読書』（東京：岩波書店、1982)。イーザーのこの著作からの引用は、本文中にページを付して示す。H. R. ヤウス,轡田収訳『挑発としての文学史』（東京：岩波書店、1976)。ヤウスのこの著作からの引用も、本文中にページを付して示す。

(4) この根拠の一例をあげておく。「…ジャンル、様式、あるいは形式の約束によって規定されている読者の期待の地平…」(p. 38)。「…再構成しうる作品の期待の地平…」(p. 40)。「…セルバンテスは、ドン・キホーテに本を読みあさらせ、じつに愛読されていた旧来の騎士物語本がもつ期待の地平をよみがえらせておいて…」(p. 38)。

(5) 上野千鶴子、『女という快楽』（東京：勁草書房、1986), p. 11.

(6) Norman N. Holland and Leona F. Sherman, "Gothic Possibilities", Elizabeth A.Flynn and Patrocinio P. Schweickart, eds. *Gender and Reading* (Baltimore and London: The Johns Hopkins Univ. Press, 1986), p. 220. ここからの引用もページを付して示す。

(7) 笹山　隆、『ドラマと観客』（東京：研究社、1982), p. ７.

(8) *Loc. cit.*

(9) David Bleich, "Gender Interests in Reading and Language",Elizabeth A. Flynn and Patrocinio P. Schweickart, eds. *op. cit.*, p. 256.

(10) Jonathan Culler, *On Deconstruction* (Ithaca : Cornell Univ. Press, 1982), p. 64.

(11) Virginia Woolf, *Orlando* (New York : Harcourt, Brace, Jovanovich, 1956), p. 189.

(12) 上野千鶴子、『〈私〉探しゲーム』（東京：筑摩書房、1987), pp. 10－11.

(13) 鈴木忠志、『騙りの地平』（東京：白水社、1980), p. 33.

(14) 早稲田小劇場＋工作舎編、『劇的なるものをめぐって』（東京：工作者、1977), p. 19.

(15) ヴァージニア・ウルフ、西川正身・安藤一郎訳、『私だけの部屋』（東京：新潮社、1969), p. 148.